



ほの研通信

第5号

平成22年8月

発行者ほのぼの研究所
〒277-8568
柏市柏の葉 5-1-5
発行責任者
代表理事大武美保子

WAM記念講演会



平成二二年七月十三日、ほのぼの研究所の設立三周年を記念する行事が、東京大学柏キャンパスで開催されました。今年も昨年同様、講演会と交流会の二部構成でした。特に、第一部の記念講演会は、今年度採択された

WAM(福祉医療機構)実証事業を記念して、多くの方々にご参加いただきました。

第一部の講演会は、柏図書館メディアホールを会場に午後一時三十分より、参加者百十一名と、ほぼ満席のなか、主賓の前々柏市医師会会長の宮地先生のご挨拶に続き、当研究所大武美保子代表理事より、「やわらか頭で認知症予防」をタイトルに基調講演を行いました。参加者の方々があちらこちらで頷いておられるのが印象的でした。

続いて、デモンストレーションとして、応募いただいた二四名の方々に、四班に分かれて「写真で語る東葛の魅力」をテーマに、一分共想法を実施しました。会場の関係

で、舞台上での実施になり、緊張されるのではないかと心配しましたが、皆さんとても落ち着いて、楽しそうにお話をされました。一つのテーマを二四人二四様の視点からとらえられたお話には、「ワァー、きれい!」とか「アッ、ここ知ってる!」

など、あちらこちらでささやきがおこり、会場全体で盛り上がりつつありました。午後四時からは、会場を校内の食堂「プラザ憩い」に移し、立食形式で交流会を行いました。六十名の方に参加いただき、肩が触れあうほどの盛況で、共想法、ほの研の話題で盛り上がっていました。ご参加いただいた皆様!三周年記念を盛り上げていただき、ありがとうございました。有意義な時間を過ごして頂けましたでしょうか。これからも、ほのぼの研究所の活動をご支援下さい。

人工知能学会で発表

平成二二年度人工知能学会(第二四回)は、六月九日(水)〜六月十一日(金)に、長崎市の長崎ブリックホールで開催されました。ほのぼの研究所の市民研究員を代表



発表する市民研究員 前川さん

して、長谷川多度、前川晃子、豊嶋尉史、塚脇章生が参加しました。参加部会は、「近未来チャレンジ・認知症予防回復支援サービスの開発と忘却の科学」で、九日(水)の午前九時より午後五時過ぎまで、一七件の興味深

い発表がありました。部会は、主宰者である大武美保子先生の挨拶でスタートし、約三十名の参加者。

トップバッターで、ほのぼの研究所から前川晃子が『認知症予防支援サービス「ふれあい共想法」における持続可能なサービス提供手法の開発』と題して、昨年新たに開発された「共想法体験コース」の概要と、実施評価を発表しました。従来の「標準共想法」で課題とされた参加者と実施者の時間負担の軽減を目的として、共想法と認知症予防の基本的な考え方を学ぶ二つの座学と共想法実習に分けたこと。これにより、ほのぼの研究所の市民研究員が研修を兼ねて、交替で体験コースの講師を務められるようになったことを説明しました。実施評価では、二つの座学と一つの実習で、基本的な講座運営のフォーマットが出来、市民研究員でも入門レベルの講師と運営が可能になったこと。体験コース参加者から、標準共想法参加を経て共想法の実施・協力者への人材育成の循環の仕組みがスタートしたことを強調しました。また、「共想法」サービス提供の持続可能性を保証するには、実施者の適正や継続可能性の見極め、専門性の向上など、サービス提供手法を巡る課題は多いが、今後とも、行政の他、医療機関と連携しながら、問題点を順次解決し、高齢者の認知症予防と社会貢献を同時に実現したいと、十五分の発表を締めくくりました。部会の最後一七番目に、大武先生が『回想法から見た共想法の考察と連携』と題して発表されました。内容は、①共想法の一般的な定義、②回想法と共想法の背景の比較、③回想法関連手法と共想法の比較、④回想法と共想法の連携、で今後とも回想法を実践研究する専門家の方と連携して、認知機能の維持向上を達成すべく、手法を深化させていっと締めくくられました。

学会初参加の私にとって、長時間にわたるハードな内容でしたが、認知症に関係されている、第一線の研究者の方々と触れ合いは、前夜祭として恒例になっている部会参加者による夕方の交流会と併せて、楽しい一日でした。来年度の開催予定は、岩手県盛岡市。 塚脇章生

長崎紀行文

発表の翌日、飛行機の時間まで、ほのぼの研究所の皆さんと一緒に長崎観光をしました。原爆ゆかりの地では、ノートを手にした小学生たちのいくつものグループが「平和案内人」の市民ボランティアたちに歴史の説明を受けていました。平和祈念公園では、「原爆、許すまじ」の歌声がスピーカーから静かに流れてきて、広島で高校時代を過ごした私にとっては懐かしい歌。半世紀ぶりに聞く反原爆のメロディーに心が引き締められました。原爆資料館では、被爆直後の長崎を撮影したアメリカ軍人、ジョー・オダネル氏の有名な写真「焼き場に立つ少年」が展示されており、この強烈なメッセージを伝える写真を残したカメラマンも近年、亡くなっておられ、死因は皮膚ガンだったそうです。キリシタン殉教の地でもあり、訪問者には悲しみの影が色濃く感じられる長崎ですが、現在は『竜馬の街』として元気づけられるよう。「NHKドラマが終わったあとが怖い。」



↑ 長崎平和公園
長崎の猫 ↓



とグラバー園の案内人が言っておられました。

日本各地から集められた仕様の違う市電が走っていたり、あちこちに「〇〇発祥の地」があったり、食べ物はおいしく、山に囲まれたすり鉢状の盆地が海に向かって開け、その斜面に街が張り付いているような風光明媚な歴史の地。ぜひまたゆつくり訪ねたいと思います。長崎の猫の七九％は遺伝子が変化して尻尾が曲がっていると聞いた大武先生は、長崎滞在中、かなり必死に「尻尾の曲がった猫」の撮影に奔走しておられましたが、成功しませんでした。尾曲がり猫については、日本「長崎ねこ」学会のホームページに、詳しく書かれています。 前川晃子

はみんぐ共想法

平成二十二年七月、柏市立介護老人保健施設「はみんぐ」で『ふれあい共想法』を実施しました。六月に共想法についての説明会を、施設の方々、通所者とその家族の方々に、二度に亘って行いました。通所者とその家族への説明会では、大きな文字、画像に合わせた大武先生の丁寧な説明に、車椅子の方を含む通所者の方々、最後まで熱心に受講され、質問も多く、参加希望の声も聞かれました。七月に入り、六名の参加者と写真を通しての聞き取り、画像の入力を行い、準備はほぼ完了いたしました。

共想法第一回テーマ「ふるさと、旅行、近場の名所」に続いて「食べ物、健康」最後は「好きなものごと」と進めて参りました。参加者の画像に目を見開き、ゆつくりと真剣な表情で話す方、流暢に要領を得た話をする方、口数の少ない方、にこやかに補聴器を携えて参加する方々、それぞれの写真に対する想いを語っていただきました。会話が弾み、例えば、「あだし野」の画像に対して、「行って見たくなりました」、亀戸天神がでてきますと、「Kさんの郷里



はみんぐにて

ね」等、参加者同士の交流が生まれました。そして、Eさんは写真を探すことでアルバムの整理ができました。Aさんは、まだ話したい写真がたくさんあるそうです。またお願いしますね、とSさん。

所見・感想カードには、参加者全員から、楽しかった、また参加したいとありました。はみんぐでの共想法の実施に当たっては、写真の収集や連絡等、施設の方々、デイケアの担当の方の、多大なご協力がありました。この場を借りて感謝申し上げます。 武下秀子

今後の予定

*九、十月開講 乗り合いタクシー利用でふれあい共想法実習全四回 ほのぼのプラザますお
*ティータイム共想法 十月二十六日 ほのぼのプラザますお、十一月三十日 流山市民活動推進センター

問合せ、申込みはメール又はFAX (04-7172-6704)

編集後記

連日猛暑が続いておりますが、会員の皆様お元気でお過ごしのことと思います。今年、被爆六十五年の年に当たり、長崎での学会に参加できたことも何かの縁と思います。又、猛暑で体調管理の難しい中、それにもめげずに記事を寄せて下さいました皆様、有難うございました。

編集子